

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：32673

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K01917

研究課題名（和文）新規Parenting（育児）マニュアル作成に向けた親子介入支援の客観的効果検証

研究課題名（英文）Evaluation of familial intervention to develop an effective parenting protocol

研究代表者

田副 真美（TAZOE, MAMI）

ルーテル学院大学・総合人間学部・教授

研究者番号：40459946

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、発達障害など養育困難のある親子に対する同時介入支援の効果を検証するため、17組の（子：8～13歳、母親：31歳～48歳）に対し、2年間の生活習慣改善・ストレスコーピング・アンガーマネジメント等を取り入れた独自のペアレンティングプログラムを親子それぞれに施行するという介入実験を行い、種々のパラメーターを用いてその効果を検証した。その結果、ペアレンティングによる親子教育・グループ活動を用いた介入は、親の養育態度の変化や子どもの社会適応性を向上させる効果が期待できた。また、事例検討から、子の前頭葉機能や親の認知、親子関係を改善する効果的な手立てであることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子にとって生活の場である家庭環境は、遺伝的要因をも覆す重要な刺激であると科学的に証明されてきた現在、今の日本社会において、より科学的に系統立てたparenting（育児）法を、国民が納得し実践できる形で提供することが急務であると考えられる。そのため、本研究の成果をもとに、普遍的で簡便なParenting法として確立させ、広く普及させることが可能となれば、たとえ遺伝的脆弱性をもった子であったとしても、保護者が迷わず希望を持って家庭生活を続けられる確率を高めていけると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to evaluate the mutual effects between parents and children in intervention support using parenting for parents and children with difficulties in raising children such as those on the autism spectrum disorder, with the ultimate goal of creating an effective parenting support manual. The subjects were 17 pairs of parents and children (children: 8-13 years old) who voluntarily participated in the study. A unique protocol created by experts in pediatric psychology and pediatrics was used to provide two years of intervention support to each parent and child. The protocol includes lectures on the importance of rhythm in life, stress coping, anger management, observation of children's behavior, and advice to parents based on the observations. As a result, intervention using parent-child education and group activities by parenting was expected to be effective in changing parents' child-rearing attitudes and improving children's social adaptability.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ペアレンティング 生活習慣 心理検査 脳機能 親子教育

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、家庭におけるペアレンティング（親などが子どもに与える生活・養育環境）の質が、遺伝素因以上に子どもの思春期以降の心身機能と行動・情緒に大きく影響するという科学的根拠が集積されている。ペアレンティングとは、「親が子に与える養育環境」と定義される¹⁾²⁾。

1990年代から盛んになった分子遺伝学研究的発展により、セロトニン関連遺伝子 5-HTTLPR とうつ病やドパミン関連遺伝子多型 DRD-4 と不注意など、精神心理疾患の罹患者において、特定の遺伝子多型の型が集積していることが明らかになってきた。つまり、「生まれながらの性質（遺伝的脆弱性）」が後年のうつ病や ADHD 発症リスクを高めているということであり、「育ちより氏」を裏付ける結果であった³⁻⁵⁾。しかしながらその後、長期間続けられたコホート研究の成果から、この考えは覆されることになる。すなわち、強い遺伝的脆弱性を持って生まれた子ども、良いペアレンティングが提供できる親のもとで養育されると、思春期の子の心身機能と行動・情緒はむしろ遺伝的脆弱性が弱い子より良くなるという結果が、ドパミン関連遺伝子 DRD-4⁶⁾やセロトニン関連遺伝子 5-HTTLPR⁷⁾などを用いた複数の研究により続々と報告されている。このことから、やはり子にとっては「氏より育ち」が重要であり、生後提供される生活環境からのペアレンティングの影響は看過できないということが結論づけられる。

一方で、一般的にこれら心身機能や発達における脆弱遺伝子を持つ子どもは、幼少期から親の「育てにくさ」の原因となることも多い。育児中の母親、中でも障害児をもつ母親は不安が高いという報告は多いが、特に先天性の脳機能障害である自閉症スペクトラム (Autism Spectrum Disorder: ASD) や多動性、衝動性、不注意を 3 主徴とする注意欠如・多動症 (attention deficit hyperactivity disorder: ADHD) を初めとする行動情緒障害である発達障害のある子の母親における育児不安や抑うつが高く、主観的育てにくさが増大し、ひいてはこれが子どもに対する否定的な養育態度を生みやすいことが示されている⁸⁻¹⁰⁾。このことは、遺伝的脆弱性のある子の家庭生活環境には、彼らの発達に重大な影響を与えるペアレンティングの質の低下が生じやすいことを意味する。ASD や ADHD をはじめとする発達障害児に対する介入支援は、その多くが子自身の認知や行動変容を目指すものと、親へのストレス軽減や認知の修正などを目指すものが別々に行われており¹¹⁻¹³⁾、親子の生活環境を改善して相互作用を好転させる目的で親子同時支援を行うプログラムの報告は国内外を通してほとんどみられない。我々はこれまで、ペアレンティング教育を用いた実践的親子支援・介入による科学的実践研究を行い、定型発達児や行動・情緒障害のある児において子どもと親の主観的・客観的評価と生理学的・心理学的・脳科学的所見が前後で平均的に改善することを証明してきた¹⁴⁻¹⁷⁾。これまで蓄積された知見からは、発達障害等のある障害児に対してもそれ以外の一般的な養育においても、このような親子に対する同時養育・教育支援プログラムは、親子間の相互作用を好転させより効果的であると考えられた。その普及のためには、このペアレンティングプログラムを系統立ててマニュアル化することが必要であり、その理論的根拠を支えるための更なる科学的データの集積が望まれる。

2. 研究の目的

自閉症スペクトラムなど養育困難のある親子に対するペアレンティングを用いた介入支援の親子相互効果を検証し、最終的には効果的なペアレンティング支援マニュアルを作成することを目標とする。

3. 研究の方法

①対象者

某県某市の親子支援施設に通う親子のうち、研究の主旨を口頭及び文書で説明を受け、自分の意志で研究に参加することを承諾した 12 組の親子（子：男子 10 名、女子 2 名平均 8.9 歳（研究開始時）、親：男性 1 名女性 11 名平均 41.3 歳（研究開始時））である。子には研究参加以前に小児科医による臨床診断がついており、さらに発達障害に関しては、今回の実践研究期間に文教大学の測定において再度 Conners3™（コナーズ 3 日本語版）（金子書房）、PARS 広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度（スペクトラム出版社）、ADHDRS-IV 評価スケール（明石書店）を用いた評価を行って確定診断を行った。すべての対象者は研究者から口頭および書面による研究の目的と内容の説明を受け、文章による同意を得た。なお、この研究は文教大学教育学部研究倫理委員会の承認を得て実施された（承認番号 教 23-001）。

②研究の概要

研究期間は 2017 年 8 月から 2018 年 8 月であり、この間親子それぞれが親子支援施設に計 5 回以上通ってペアレンティング理論に基づいたワークショッププログラムに参加することを義務付けた。ペアレンティングワークは、親・子別々の日程にそれぞれ、小児科医・公認心理師・社会福祉士・教育カウンセラーなど専門家が独自に作成したプログラムに基づいて、1 回 100 分の少人数グループワークとして行われた。親は、自らの学び以外に子の観察結果をもとに家庭での関わり方を専門家に学ぶ個別支援も受け、

家庭生活で実践をするよう促された。さらに、2017年8月（第1回介入前とする）、2018年2月（第2回介入中とする）、2018年8月（第3回介入後とする）の3回にわたり文教大学において、子の欲求不満場面での社会的対応の測定と親の自我状態評価測定を以下の方法の通りの手順で行った。この他、各種生理学・心理学・脳科学測定も同時に行った（図1）。また、①の対象者に対し、2019年8月～2020年2月までに3回のワークショップに参加（親・子）してもらい、2019年8月に親子の測定、2020年2月ごろに質問紙のみの測定を行い、事例の検討を行った。

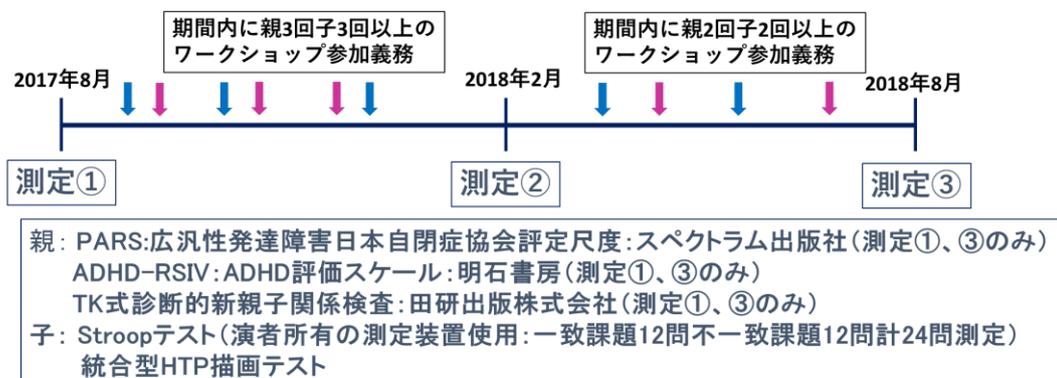


図1 介入プログラムのスケジュールと親子への検査内容

4. 結果と考察

①前頭葉機能（ストループテスト）

研究期間前後で大人子ども共に平均的に改善されていた（図2）。実験に対する慣れや子どもにおける前頭葉機能の生理的な発達は当然考慮しなければならないが、ペアレンティングを実践することによる親子の生活環境の改善が親子双方の脳機能を活性化することに影響したと考えられた。

②抽象語理解力テスト

標準抽象語理解力テストを用いて、子の抽象語理解の程度を測定した。全員の間違った問題の数、すなわち誤答の数を数え、3回の測定それぞれでの平均を図3に示す。1回目と3回目の誤答数の平均は変わらなかったが、2回目、すなわち2018年2月の測定では、子どもたちの誤答の数が平均的に減ったことがわかった。これを、低学年（小学3年生以下）と高学年（小学4年生以上）に分けて結果をグラフに表した（図4）。特に低学年にプロジェクトの流れにおいて2回目の成績が良かった。この原因として考えられるのが、図1で示した測定日のスケジュールより、2017年8月と2018年8月の測定に比較して、2018年2月の測定では、項目が少なく、時間も短いスケジュールになっていた。特に、集中の途切れやすさが目立ちやすい低学年児童においては、学習を含めた活動をなるべく短時間に区切ることで、パフォーマンスを上げることができる、ということが示唆された。正しいペアレンティングが、子どもの語彙力上昇にもつながる可能性が考えられた。

③統合型家一人一人描画テスト（S-HTP）

S-HTPを用いて、子の内的側面の変化を評価した。ポジティブな評価は教示の理解、統合性、自己評価、エネルギー水準、内的豊かさ、社会性の6項目があり、-2点、から2点で評価し、ネガティブな評価としては攻撃的、強迫的、衝動的、防衛的、緊張的の5項目があり、-2点、から0点で評価する。全体としてどの項目においても、また、合計得点も点数が高いほど、良い評価となる。これらの評価項目平均得点の一部の変化を図5に示す。また、赤線で全11評価項目の合計得点の平均値変化を表した。ポジティブな評価である統合性・内的豊

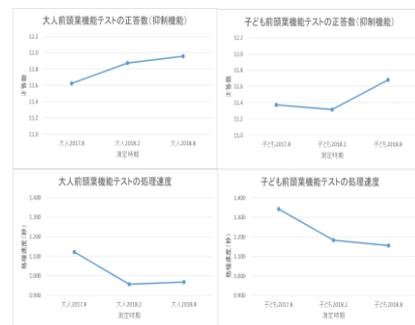


図2：ストループテストにおける正答数、及び処理速度

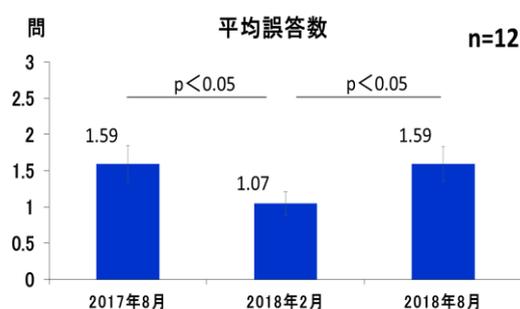


図3：抽象語理解力テストにおける誤答数の変化（子ども全体）

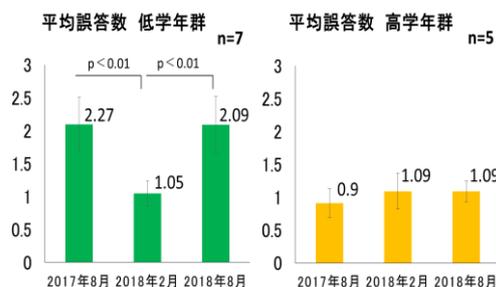


図4：ストループテストにおける正答数、及び処理速度の変化

かさ・社会性いずれも初回と3回目を比較すると平均得点は上昇しており、特に統合性はマイナス得点からプラス得点に転じていた。また、ネガティブ評価項目である攻撃的・強迫的・衝動的はいずれも初回と3回目を比較すると平均得点は上昇した。ただ、攻撃的・衝動的については2回目である2018年2月の結果が最も平均的に良かったことから、測定スケジュールの過密さに関係している可能性が考えられた。

いずれにしても、平均的に評価得点は回を追うごとに上昇しており、発達期の子どもの生理的な変化は考慮に入れなければならないものの、ペアレンティングによる短期間での子どもの認知や行動へのポジティブな効果があったことは十分に考えられる結果であった。

④P-F スタディ (子)

図6に介入前(2017年8月)と介入後(2018年8月)両方の測定が可能であった11名の子のP-Fスタディにおける、E-A、I-A、M-A、O-D、E-D、N-Pの各項目、及びGCR(集団順応度)の各項目の平均Tスコアの介入前後変化をグラフにして表した。E-Aは48.8→48.2と大きな変化はなかったが、I-Aは46.4→49.3、M-Aは51.5→54.7といずれも平均的にTスコアが増加した。このうちM-Aは介入前後で $p<0.05$ の有意差(Wilcoxonの符号付き順位検定)を認めた。また、O-Dは53.1→54.7と増加した一方、E-Dは53.1→48.3、N-Pは49.3→47.3と減少したがいずれも統計学的有意差は認めなかった。GCRは49.8→49.0とほとんど平均値に変化はなかった。前後でアグレッションの方向性としてはM-Aが有意に上昇していた。M-Aはアグレッションの方向が内外ともに向けられず、回避される反応であり、とくに対人関係において、相手との対決を避けて妥協する傾向を示している。寛容的であるともみられるが、抑圧的ともみられることもある。この反応が多いことは、相手に対する親和欲求が強いことが考えられる。また、GCRにおいては、11名中9名が介入後に平均値±SD範囲内の値に変化し、欲求不満耐性を高まり、欲求不満場面での不安が軽減していることが考えられた。

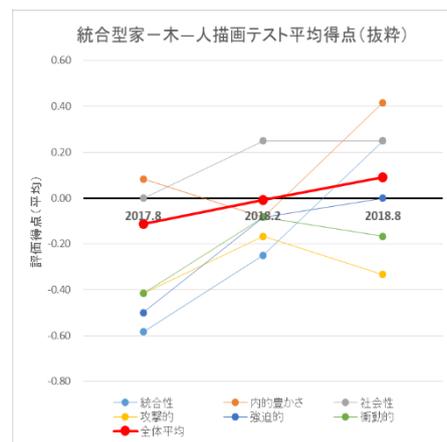


図5: 描画テストの平均評価得点の変化



図6: P-Fスタディの各因子ご平均得点の

⑤親子関係テスト (TK式親子診断テスト)

2017年8月、及び2018年8月の2回、親が80問の質問に回答し、①不満②非難③厳格④期待⑤干渉⑥心配⑦溺愛⑧随順⑨矛盾⑩不一致の10項目に関連する親の子に対する養育態度が評価した。得点はパーセンタイルに変換し、20パーセンタイルまでが「危険」50パーセンタイルまでが「中間」そして51パーセンタイル以上が「安全」とされる。図7は、男性1名女性11名平均41.3歳(研究開始時)、計12名での各項目の平均得点の変化を示したものである。2017年8月の時点では、⑤干渉、⑦溺愛が中間域に入っていた。2018年8月には干渉が安全域に変化しており、その他多くの項目でパーセンタイル値が上昇していた。干渉は子どもに失敗させないよう、口うるさく指図したり、すぐに手を貸してこまごまと世話を焼いたりして、子どもに責任を持たせ見守っていることができない親の態度を意味し、溺愛とは親が子の言いなりになってしまう養育態度を意味する。ワークショップに参加することにより、親は平均的に子どもを甘やかすことなく冷静に見つめつつ、養育的な態度をとる親が多くなったと考えられた。

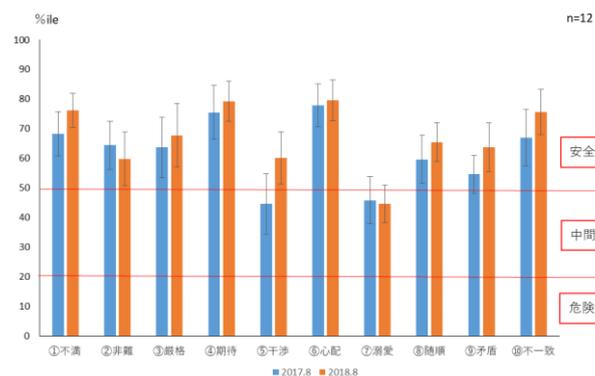


図7: TK式親子関係テストの平均パーセンタイル値の

5. まとめ

今回、我々が提供したペアレンティング教育は、①生活習慣の確立による自律神経機能をはじめとする脳機能改善の重要性、②生活の中で交わされる双方向的な親子のコミュニケーショントレーニング、③家庭内での子どもを含めた役割分担の実践、④親子で共有するストレスコーピングとアンガーマネジメン

ト、⑤ポジティブ思考への認知の修正、そして⑥親に対する家庭教育の軸の確立の重要性、の6項目にわたってワークショップ形式で展開され、親と子別々に同じ理論を伝え実践させることで、親子での相乗効果を期待した。家族ではない専門家から家庭生活での理念の共有を促すことで、特に親の不要な心理ストレスを軽減することも目指した。結果として親の自我状態が変わり、それに伴う行動パターンの変容を促せたことは、親のストレス軽減とレジリエンス上昇に貢献できたとも考えられる。このことが負の相関関係にある子どもの非社会的アグレッションの方向性・型を結果的に変容させ得たのであるなら、今回用いたペアレンティングによる親子教育グループ活動を用いた介入による親子同時支援は大変有用であると考えられる。

しかしながら、今回はまだ対象者の数が少なく、また期間も1年間と短いため、今後は事例数を増やした上で、脆弱因子を保有する子の幼少期から家族ぐるみでペアレンティング・トレーニングを用いた親子介入支援を行い、子の長期的な発達と社会行動・社会適応性への効果を検証し、最終的にはこの理論をもとにした、新規ペアレンティングトレーニングマニュアルとして系統化することで、新たな療育・養育プログラムとして提言していきたいと考える。

文献

- 1) Coldwell J, Pike A, Dunn J: Household chaos - links with parenting and child behaviour. *J Child Psychol Psychiatry* 47: 1116-1122, 2006.
- 2) Hahn-Markowitz J, Berger I, Manor I, et al: Cognitive-Functional (Cog-Fun) Dyadic Intervention for Children with ADHD and Their Parents: Impact on Parenting Self-Efficacy. *Phys Occup Ther Pediatr* 38: 444-456, 2018.
- 3) Lesch K, Bengel D, Heils A, et al: Association of anxiety-related traits with a polymorphism in the serotonin transporter gene regulatory region. *Science* 29:1527-31, 1996.
- 4) Maher BS, Marazita ML, Ferrell RE, et al: Dopamine system genes and attention deficit hyperactivity disorder: a meta-analysis. *Psychiatr Genet* 12:207-215, 2002.
- 5) Katarzyna K, Bielecki M, Racicka-Pawlukiewicz E, et al: The SLC6A3 gene polymorphism is related to the development of attentional functions but not to ADHD. *Sci Rep* 10:6176, 2020. doi: 10.1038/s41598-020-63296-x.
- 6) Bakermans-Kranenburg M, Ijzendoorn M, et al: Differential susceptibility to rearing environment depending on dopamine-related genes: New evidence and a meta-analysis. *Dev and Psychopathol* 23: 39-52, 2011.
- 7) Kochanska G, Boldt L, Kim S, et al: Developmental interplay between children's biobehavioral risk and the parenting environment from toddler to early school age: Prediction of socialization outcomes in preadolescence. *Dev and Psychopathol* 27:775-790, 2015.
- 8) 新美明夫, 上村勝彦: 就学前の心身障害児をもつ母親のストレスー健常幼児の母親と比較ー. 発達障害児研究 3:206-216, 1981.
- 9) 根室あゆみ, 山下光, 竹田契一: 軽度発達障害児の主観的育てにくさ感. 発達 25:13-18, 2004.
- 10) 眞野祥子, 宇野宏幸: 注意欠陥/多動性障害児の行動特徴と母親の養育態度間の関連性. 脳と発達 39:19-24, 2007.
- 11) Virues-Ortega J, Julio FM, Pastor-Barriuso R: The TEACCH program for children and adults with autism: a meta-analysis of intervention studies. *Clin Psychol Rev* 33:940-53, 2013.
- 12) Welch CD, Polatajko HJ: Applied Behavior Analysis, Autism, and Occupational Therapy: A Search for Understanding. *Am J Occup Ther* 70: 7004360020p1-5. doi: 10.5014/ajot.2016.018689, 2016.
- 13) 肥後祥治, 前野明子: 思春期・不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者に対するペアレントトレーニング実施の効果. 鹿児島大学教育学部研究紀要 70:105-114, 2019.
- 14) 成田奈緒子, 田副真美. リズム遊びを中核とする介入による幼児の生活習慣改善と脳機能発達への有用性の検討. 日本小児科学会雑誌 114:1882-1891, 2010.
- 15) 小澤有希, 小関英里圭, 今泉奈津季, 他. キャンプを用いた発達障害児の家族支援(2)-児の前頭葉抑制機能変化に関連する因子-. 発達障害研究 35:334-340, 2013.
- 16) 今泉奈津季, 岡戸奈都子, 小澤有希, 他. キャンプを用いた発達障害児の家族支援(2)-保護者の心理的効果とそれに関連する生活習慣-. 発達障害研究 35:341-347, 2013.
- 17) 成田奈緒子, 成田正明, 田副真美. 自閉症スペクトラム児における統合型-HTP法を用いた描画の経時的変化. 日本小児心身医学会雑誌 22: 175-182, 2013.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 成田奈緒子	4. 巻 26(1)
2. 論文標題 親の軸が子を変える 育てにくい子ほどよく伸びます	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育と保健	6. 最初と最後の頁 67-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田副真美	4. 巻 13
2. 論文標題 ルーテル学院大学創立110周年記念事業公開シンポジウム「一事例を多様なアプローチで考察する ~これからの臨床心理学の可能性~」シンポジウムの主旨	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ルーテル学院大学大学院臨床心理相談センター紀要	6. 最初と最後の頁 5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成田奈緒子	4. 巻 24(3)
2. 論文標題 脳の発達から考える子どもの睡眠と生活習慣の重要性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小児歯科臨床	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田副真美	4. 巻 12
2. 論文標題 小児摂食障害の臨床像および心理・社会的特徴 症状移行の有無による検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 総合的健康美学研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 成田奈緒子	4. 巻 71(11)
2. 論文標題 育脳 五感を育む育児 (総説・査読無)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小児科臨床	6. 最初と最後の頁 2419-2425
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田副真美	4. 巻 58増刊号
2. 論文標題 研究成果を現場に活用すること：小児医療・療育の現場で働く心理職のためのミニマルエッセンス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 146-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田副真美, 高橋海来, 山中さくら, 成田奈緒子
2. 発表標題 新規ペアレンティングマニュアル作成に向けた親子支援の客観的効果検証(1)
3. 学会等名 第60回心身医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 成田奈緒子, 川手未来, 田副真美
2. 発表標題 新規ペアレンティングマニュアル作成に向けた親子支援の客観的効果検証(2) 事例検討ー
3. 学会等名 第60回心身医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 成田奈緒子
2. 発表標題 親の軸が子を変える 育てにくい子ほどよく伸びます
3. 学会等名 第25回日本保育保健学会市民公開講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉田将大, 成田 奈緒子, 田副 真美
2. 発表標題 「気になる子」支援における保育者の困り感尺度の作成の試み
3. 学会等名 第25回日本保育保健学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 黒岩千枝、田副真美、小木曾梓、岩波純平、吉田有希、作田亮一
2. 発表標題 入院治療を行った神経性やせ症(AN)双胎児におけるエログラムの検討
3. 学会等名 日本交流分析学会第44回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 成田奈緒子
2. 発表標題 子どもの睡眠・生活リズムの重要性
3. 学会等名 第24回日本保育保健学会教育講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 成田奈緒子
2. 発表標題 子どもの睡眠と生活習慣の重要性
3. 学会等名 日本小児歯科学会 第 36 回北日本地方会・第33回北日本地方合同大会プレセミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新平鎮博 前川航太郎 成田奈緒子 長岡利保 副島賢和
2. 発表標題 病気のある子どもたちが抱える困り感への対応 ～教育，医療，福祉，心理のまどをあけて～
3. 学会等名 全国病弱虚弱教育研究連盟総会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田副真美
2. 発表標題 シンポジウム 小児神経科医が知っておくべき思春期神経発達症・心身医学 外来で役立つ心理学：心理検査の意義とストレスコーピング
3. 学会等名 第60回日本小児神経学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山村健真、田副真美
2. 発表標題 前思春期・思春期前期の子どもの瘦身理想の内在化傾向
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 成田奈緒子
2. 発表標題 音楽・リズムで脳とこころを育てる
3. 学会等名 日本音楽療法学会関東地方会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田副真美
2. 発表標題 耳鼻咽喉科心理外来におけるエゴグラムを用いた臨床・研究・教育
3. 学会等名 日本交流分析学会第42回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田副真美
2. 発表標題 小児摂食障害患児とその母親のエゴグラムにおける特徴
3. 学会等名 日本交流分析学会第42回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 成田奈緒子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 PHP研究所	5. 総ページ数 215
3. 書名 子どもの自己肯定感は親のひと言で決まる！	

1. 著者名 成田奈緒子・石原新菜	4. 発行年 2020年
2. 出版社 子どもにいいこと大全	5. 総ページ数 191
3. 書名 主婦の友社	

1. 著者名 成田奈緒子・上岡勇二	4. 発行年 2019年
2. 出版社 産業編集センター	5. 総ページ数 164
3. 書名 子どもが幸せになる「正しい睡眠」	

1. 著者名 北島善夫、武田明典（編著）、成田奈緒子（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 109P中19-28P
3. 書名 教師と学生が知っておくべき特別支援教育	

1. 著者名 成田奈緒子、上岡勇二（分担執筆）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 産業編集センター	5. 総ページ数 163
3. 書名 子どもが幸せになる「正しい睡眠」	

1. 著者名 成田奈緒子、上岡勇二、子育て科学アクシス(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 合同出版	5. 総ページ数 151
3. 書名 子どもの脳を発達させるペアレンティング・トレーニング 育てにくい子ほどよく伸びる	

1. 著者名 小野明(編著)、成田奈緒子(分担執筆)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 226p中175-180p
3. 書名 脳内メカニズムを紐解く	

1. 著者名 成田奈緒子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 主婦の友社	5. 総ページ数 191
3. 書名 しつけと育脳	

1. 著者名 成田奈緒子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 主婦の友社	5. 総ページ数 192
3. 書名 しつけと育脳	

1. 著者名 成田奈緒子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 PHP研究所	5. 総ページ数 191
3. 書名 脳科学からみた男子の「ちゃんと自立できる脳」の育て方	

1. 著者名 成田奈緒子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 主婦の友社	5. 総ページ数 20
3. 書名 頭のいい子を育ててきたよ！えほんの女の子	

1. 著者名 田副真美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 南江堂	5. 総ページ数 348
3. 書名 「認知行動療法」「遊戯療法・箱庭療法」『初学者のための小児心身医学テキスト』日本小児心身医学会(編)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	成田 奈緒子 (NARITA NAOKO) (40306189)	文教大学・教育学部・教授 (32408)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------